慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一般教育特別号予告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.10 (1956. 10) ,p.733(45)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

過程に絶對の、不可缺・不可避の條件ではない。勞働過程に起因しない。それゆえに、偶然的損害の保險・保險料は、商品の價値を、絶對に、形成しない。

(2)經常的損害の保險。この保險は、すなわち性質損害・消耗損害の保險は、その保險の保險料は商品の價値を形成する。もしこのような保險があるとするならば。（理論的には存在可能）。

(3)磨損の保險。「磨損とは（道德的磨損を別とすれば）、固定資本がその消耗により、その使用價値が失われる平均度において漸次的に生産物に交付する價値部分である。[66]」「使用そのものによつて生ずる[67]」磨損の保險は、この保險の保險料は商品の價値を形成する。物生命保險、財産生命保險、家屋生命保險、もしこのような保險があるとするならば。（理論的には存在可能）。

(4)道德的磨損の保險。「競爭戰は、殊に決定的變革に際しては、舊式勞働手段をその自然的死滅前に新式のものと代えることを餘儀なくさせる。より大きな社會的規模での經營設備のかかる時ならぬ更新を強要するのは、主として破局——恐慌である。[68]」このような事情によつて生ずる道德的磨損の保險は、その保險料は商品の價値を形成しない。もしこのような保險があるとするならば。（理論的には存在可能）。

(5)「自然諸力の影響によつて[69]」生ずる磨損の保險。「たとえば枕木は、現實の磨損によつてのみならず腐朽によつても損傷する。『鐵道の維持費は、鐵道交通に伴う磨損よりも、むしろ、大氣に曝されている木材・鐵・および墻壁工事の質によつて定まる。嚴冬の一ヵ月は路盤に對し、まる一年間の鐵道交通よりも多くの害をなすであろう。[70]』」性質損害、これには消耗損害も老朽損害も入つているが、ただし經濟學で云う本來的・經常的損害とは區別せらるべきものである。この保險の、その保險料は商品の價値を形成する。もしこのような保險があるとするならば。（理論的には存在可能）。

(6)仕損品の保險。この保險は、この保險の保險料は商品の價値を形成する。印南博吉氏の見解と相違するところである。もしこのような保險があるとするならば（理論的には存在可能）。

(7)商品資本と貨幣資本、すなわち流通資本に對する保險、流通過程における資本に對する保險。この保險の保險料は、すなわち流通費用としての保險費用は、商品の價値を形成しない。

さて印南博吉氏は、「この類推論法に立脚する結果は、磨損の塡補や維持および修繕勞働のような價値形成的なものと全く異なり、異常な天災・火災・洪水などによる破壞に關する保險は價値形成的でなく、剩餘價値からの控除であり、損失であるとするマルクスの主張は否定され、少なくとも重大な修正を加えられることになる。ゆえにもし兩氏の主張が正しいとするならば、マルクスの保險論に對するわれわれの評價は、大いに異なつてこなければならない。[71]」と述べられているが、これは違う。正しくない。筆者の見解によれば、上述のごとく商品の價値を形成する保險も存在しうることになるが、だからと云つてマルクスの主張が否定されたり、重大な修正が加えられたり、その評價が低落したりはしない。保險には、物保險にして企業保險なるものにも、多くの種類が考えられると云うことである。マルクスの保險理論は、その「資本論」中における見解は、明かに、そして絶對に、流通費用としての保險費用または偶然的損害の保險に限られており、これに關しては、斷片的に、不統一にではあるが、正鵠、卓越せる理論が論述せられている。このかぎりにおいては、なんらの誤謬も、從つて修正も必要としない。「資本論」中における保險なる語の上に、「流通費用としての」または「偶然的損害の」なる文言を冠すれば、それにてこの場合での彼の保險理論は完璧となる。そしてマルクスが商品の價値を形成する種類の保險について論及・論述するところが無いとしても、彼が一八一八～一八八三年代の人物であり、「資本論」の第一卷が一八六七年に、第二卷が八五年に、第三卷が九四年に公刊せられたものであり、そしてまた各種の新樣式保險・新種保險——これらのうちには商品の價値を形成する保險が含まれる——の目覺ましい發達は、現代の、最近のことであり、保險學者による保險理論の經濟學的研究もあまり遠くへは遡れない[72]と云う諸條件を列擧してみれば、マルクスが「資本論」中において、商品の價値を形成する保險になんら觸れるところが無かつたと云う原因・わけの、思い半ばに過ぎるところがある。

（註65・66・67・68・69・70）前掲「資本論」①、三六一頁、③、二一九頁、③、二一八頁、③、二一九頁、③、二一八頁、③、二一八頁。

（註71）前掲印南氏「保險の本質」五〇九頁。

（註72）例えばEmanuel Herrmanが "Das Versicherungswesen ist das Stiefkind der Volkswirtschaftslehre." と嘆いたのは Die Theorie der Versicherung vom wirtschaftlichen Standpunkte, 1 Aufl. 1867. のことである。

（昭和三十一年八月十四日稿）

『保險と價値形成の問題』について

三田學會雜誌　一般教育特別號　豫告
（十二月發行豫定）

論　說

ルグレーティウスに就いて……樋口勝彦
エリオットの「荒地」をめぐる問題…上田保
Mazurkiewiczの定理の
　擴張について……中村勝彦
「マルテ」とキェルケゴール……塚越敏
藤原氏遺體に關する動物學的調査……森八郎
ディドロ『運命論者ジャックと
　その主人』……原宏

書　評

「現代語學教育に關する諸問題」……大久保洋海